



第 9 号 ぐるーぷ「倶楽志」in 飯能

—すむ、きる、たべる文化交流—
<http://groupkurashi.seesaa.net>

代表 相田通子
 〒357-0045
 飯能市笠縫409-7
 TEL/FAX 042-974-3538
 sugita22@mve.biglobe.ne.jp

総会、新撰組のふるさと日野史跡めぐり&八王子城跡

23年4月30日にぐるーぷ倶楽志 in 飯能の総会を実施すると共にバスで日野市・飯能とゆかりが深い八王子城へと向かいました。

毎年、飯能の歴史を語っていただくのにはこの人しかいないという思いで、いつも恐れ多いのですが、元郷土館館長：浅見徳男氏にお願いいたし、車中や現場でお話をお伺いしながらツアーを実施しました。



きっかけは日本で最初の女医荻野吟子が飯能の女丈夫田中かくと親友だったと事実で驚愕し、それから調べていると「飯能の幕末」「明治期の人物史」などいろいろな関連や好奇心も相まって飯能や近辺の歴史文化を理解するにはとても良い機会。ついにはドラマでもたびたび取り上げられる新撰組のふるさと(=原点)にまで飛び火してしまいました。これぞ歴史あり！！

行程：

- ①日野市立新撰組のふるさと歴史館
- ②日野宿本陣
- ③土方歳三の墓
- ④高幡不動尊
- ⑤八王子城跡

～日野宿本陣～

甲州道中に現存する木造建物1863年佐藤彦五郎俊正が天然理心流「佐藤道場」を開き、そこに後の新撰組局長となる近藤勇や副長の土方歳三、沖田総司、井上源三郎たちが激しいけいこに励んだ場所。



～新撰組のふるさと歴史館～

新撰組の書状など多くの史料が残されており学芸員の方に説明をしていただきました。



～高幡不動尊～



新撰組の福長：土方歳三の菩提寺(天保6年の生まれ) 明治2年5月11日箱館戦争で戦死。35歳。近所の生家を訪問し、石田寺のお墓(土方歳三)をお参りしてきました。

飯能市と八王子城の関係／堀越喜代子



今の飯能市の中山地区には智観寺周辺に広範囲な中山居館跡、中山四天王、中山六人士等の郎党屋敷があった。長期に亘る大戦乱で丹党の勇士は次々と負けて遺族は山中に閉居を続けて再起の日を待った、中山季国(すえくに)、季仲一族もその仲間である。家勝になってやっと一軍の将になる。家勝は上杉の招きに応じて河越城の築城に参加するが、北条軍の河越攻めに上杉方は敗れ、家勝は命からがら中山に逃げ帰ったという、それから家勝は信仰心が非常に熱い人で永田の萬福寺の禅僧、斧屋文達のもとで修業し、能仁寺(飯能)開山には息子の家範と共に力になったと伝えられている。その後、家勝の息子、中山家範は北条氏照の家臣となり、武州八王子城の守将となる。そしてこの事が八王子城と中山氏との関係になる。

その後、北条氏と秀吉の間で緊張状態が生まれ、氏照は来るべき豊臣軍の来襲に備えて本丸西側に曲輪を配置したり、本格的な改修を実施した。1590年北条氏照は八王子に重臣を置いて守らせ、自身は小田原城に籠った。秀吉の大軍が小田原城を囲むと同時に、その支隊である前田利家、上田景勝は一万五千の大軍をもって八王子を攻撃、守る家範軍はたったの三百、決戦が血戦となり八王子城はわずか一日で落城してしまった。

家範は家臣に脱出を命令したが、家臣は主人と命を同じくすると脱出せず、家範の二児の脱出を助けよとの厳命により包囲軍の一角を破って二児(照守二十一才、信吉十四才あ)を守りながら府中方面に逃げ、家範は四十三才で自刃、長男と妻、女達も後を追った。

そして小田原城に居た北条氏照は主戦派とみ

なされ切腹を命ぜられる。八王子城跡近くに北条氏照の墓を中心に左右に中山家範と孫の中山信治の墓があり静寂な中に眠っている。その後、家康により草の根を分けても家範の遺児を探し求めよとの命令により、ようやく見つけ出された二人は家康のもとに引き取られて旗本に加えられ、照守は二代将軍秀忠に附せられ、信吉は水戸家代々の筆頭家老となり頼房を助け「水戸光圀」を推薦して福将軍家礎を固めた。二人とも中山家出身としては名高い人物になる。照守の墓は能仁寺にあり信吉より代々、智観寺に眠っている。



仲秋の名月の宴

平成23年9月11日、飯能河原(タケマツ)で、仲秋の名月の宴を開催しました。



月と一緒に黄色の着物をきていらっしゃいます

飯能市は山林が多く、昔は生糸や西川材で産業がおおいに潤っていました。全国から売買をしに飯能へと売人が集まる良き時代があり、当然庶民文化も生まれ、花街界限も料亭などでの座敷遊

びが支流を占め、大いに華やいでいました。

宴では、地元出身の小唄・端唄の家元：若宮美千代さんと駿河台大学邦楽三味線倶楽部を招き飯能河原に浮かぶ水面と空の月を眺めながら唄と演奏を楽しんでいただきました

京都大覚寺大沢の池に船を浮かべ、鑑賞するというのは三大名月の一つにも数えられています。今回それを少し真似てみました。



小唄：若宮美千代の弾き唄い 月づくし (①水たまり②一声は月が③蟬しぐれ④お月さんホイ)

端唄と小唄そして三味線の歴史と特徴 ／若宮美千代

三味線、端唄、小唄について、その歴史や特徴を御紹介します。

～三味線～

【歴史】400年と少し前石村ケンギョウという人が発明。<さわり>という共鳴の工夫が生まれた時という人やジャビセンから生まれたという人そして歌舞伎と共に発展したという人もいます。

【特徴】日本動物愛護協会の定めで国内の犬猫は皮として使われていず、アジアの国から特にフィリピンから輸入。すでに皮となってなめされて輸入されて来ることが現在は大半のようです。木は熱帯のほうからの輸入だが、中国の輸入がこの10年来増えて、日本に良いものが入ることが少なくなりました。(何十年もたった大木の中央に部分を使うのが良しとされていて、今は本当に良い木が入ってくるのが少ない)糸はナイロンもありますが、小唄・端唄では絹糸を使用。国内では滋賀県が大半製造。太い糸は100本以上の絹糸をより合わせて作られています。不思議なことは高い音に調弦して演奏した後、低い音で演奏しようと調弦し直した折、三味線の糸が勝手に縮んで音が

高くなっていくことです。楽器の不思議です。

～端唄～

【歴史】三味線が生まれた時とあまり遅れずに流行歌、労働歌として関西に発生。屋外の歌として民謡が発展していったのと同時に室内の歌としてはやり歌の形やお座敷の唄の形で発展し、歌舞伎が江戸に来る前に西から東へと発展していく。

【特徴】三味線に乗せて唄う曲が多く、華やかなもの、ゆったりしたもの、明るいものが一定のリズムで作られている場合が多い。隣の部屋にもしっかり聞こえる音楽のボリュームです。

～小唄～

【歴史】100年と少し前、世の中で贅沢が禁止になった折、遊び人と芸人が部屋の中から外に音が漏れないように、指で三味線の音を出してお酒の席を支えていたのが小唄の始まりです。清本お葉という16才の天才が歌舞伎音楽から短い唄を作ったのが始まり。

1曲2, 3分の中で起承転結があり、季節があり色事の場面が想像できるウラの意味もある、深いあそびの唄として時代が必然的に生んだものです。

【特徴】三味線にからませて唄う曲がほとんどで2, 3分程の中でリズムやノリが変わり、作っている音も高低があり、聞いては味がありますが、演奏するのは難しい深みのある日本の音楽です。

◇

長唄「都風流」／松下静雄



若い頃(昭和30年頃)まだまだ飯能も賑やかだった。私はまだまだ社会に出て駆け出しだった。当時新年会、忘年会、役員会など殆どがお座敷で、先輩達はよく「小唄」「長唄」を唄った。そんな時「こう云う事もしなければならぬのか」と思って始めたのが長唄で、だからうまくない。「長唄」などともない。唄う人の格が違う。断っても断っても断り切れず結局言われたよ

うになってしまう。そんなことで「長唄」も始めて長い。でも腕前と云えば始めて一年位の人と同じ位だ。

昨年十月、国立劇場で唄った。大勢の人が来てくれて、感謝の気持ちでいっぱい。唄の内容が飯能の地にも似たところがあって面白い。

「引けば九つ何故それを四つと云うたか、吉原は拍子木までが嘘をつく」

吉原では、午後十二時(九つ)をもって閉店と決まっていたが、十二時になっても花魁は「まだ十時(四つ)ですよ」と嘘をつくという。

戦後二十二年に前代の都(ここでは浅草界限)を唄ったもので、久保田万太郎氏の作詞である。

「前代」と云うから勿論いまの事ではない。東京浅草付近の情緒を唄ったものである。

この辺では富士と筑波の美しい山々が見える山を眺めつつ「川上指していく舟や芦間隠れに面白き」と隅田川の夏の風情を唄う。ほうずきを売る「千成市」もあり、お盆も近くなりますと、仏前に供える草花を売る「草市」があります。秋になるときれいな声をする虫の「虫売り」が柳の影に店開きをし、中でも「鉦たたき」がこつこつと鳴くのが印象的です。秋も更けて九月九日には「菊供養」があり、供養された菊を家に持ち帰り「病気、災難避け」としたそうです。賑わって混雑した通りには「仲見世の人波分けて打ち連なる、分けて一人は年かさの目に付く粋な挿し櫛も」と唄って、粋な男女の姿も、そして年かさの女のなまめかしく挿した櫛が目につきますと浅草らしい風情が伺われます。

秋も更けて澄んだ夜空に星が綺麗にきらめきます。吉原は賑わってまいります。人目を避けてか羽織を頭から被っていく姿も見られます。客と花魁との楽しい嘘の付き合いが想像されます。

夜更けまで「お歯黒どぶ」に映っていた賑やかな繁華な灯りも、夜更けにはすっかり消えて、冷たい霧晴れの朝、庭を掃除する熊手にはいっぱいの落ち葉がかかってきます。

十二月にもなって正月用品を売る「年の市」となりますと、その頃は雪も降りがちで、そんな雪の日でも市は賑わって、境内は雪の傘でいっぱいになります。江戸浅草ではこんなところでした。昨年十月、国立劇場でこの唄を唄うに際して、案内状に「歌詞と解説」をつけてあげた。殆どの人から内容がさらに理解でき、とても助かりましたと言われました。

一概に言い切れませんが、長唄は芝居の伴奏音楽でしたから言葉が多い。長唄は言葉の音楽でもあり、その言葉からその時々時代の様子、生活様式(文化)を知る事ができます。そして明治以後、追いつけ追い越せと取り入れた西欧文化の陰に消え去ろうとしている。この国土から生じた文化を見出すことができます。長唄は「合の手」も多く音楽ですから楽器音も楽しみですが、その時代の美しい言葉と文化を知る意味からも興味を持って楽しんでいきます。

【ひとこと】 たまたま昨年拝聴いたし、その歌詞と解説をいただいたとき、江戸から明治の時代背景 人物、内容などとても興味をそそられ、今後の広報誌にもつながっていくのではと思いました。浅草も時代を語るにはとても興味があるところ。以前吉原跡を訪ね、たまたま「浄閑寺」(遊女の投げ込み寺)に立ち寄ったとき、無縁仏の無数のお墓や、吉原を舞台に描いた有名な小説家の永井荷風の筆塚とそのうら哀しい叫びを描いた歌碑が建っていました。後にそこを舞台にした小説「すみだ川」や映画など拝見しましたが、なんとなく胸がキューンとなったのを覚えています。お墓は雑司ヶ谷霊園にあります。(梶田)

飯能の古典芸能について

／本橋 良浩

昨年、ぐる一ふ倶楽志 in 飯能の主催「仲秋の名月・宴」での森和夫氏の講演「アユの話」で披露していただいた小唄河太郎に感動したことを書きました。(本誌第7号)

今年春、新撰組ふるさと歴史館や八王子城跡見学のバス旅行に共にさせていただいた。バス車中で「幕末の飯能」の話をされた浅見徳男氏から『飯能ペン』をいただいた。氏の随筆「山川信次郎と夏目漱石」について感想を求められ、東京での資料をあったらほしい、とのことであった。その成果の一端は氏が来年単行本として上梓されるであろう。

その『飯能ペン』(第19号・2010年11月)を読むと、森氏は随筆「哀優」のなかで「仲秋の名月・宴」で聞いた小唄「河太郎」が書かれているではないか、私は冷や汗をかいた。53ページにこう記されている。

「町の小さな旅館に投宿した私は、夜、外へ出てみた。街のはずれにあった宿のまわりには一面の田圃で、側溝には蛍が二、三匹光っている。遠く祭囃子の太鼓が聞えた。

私は「河太郎」という小唄の文句を思い浮べた。

すすきかついだ河太郎
かぼちゃ畑をぶらぶらと
酒か団子かいいきげん
用水掘のうすどろを
さそう雨気の小夜ふけて
月の遠音の村ばやし」

こう書いてくると森氏の味わい深い歌声が聞えてくるようだ。無論私はたった一度だけ森氏の講演を聴いたにすぎない。森氏は今年(2011.6.30)に惜しくもなくなれたという。浅見氏から、森さんから山川信次郎と夏目漱石の話はとてもいいから続きも書いてください、と言われていたんだが、『飯能ペン』は森氏の援助で支えられているからどうなることやらと悲しげに私に語った。

森氏は「ここ飯能を貫く入間川は荒川と合流して隅田川となり東京湾に注ぐのである」と述べる。川といえば私は映画「カサブランカ」の一節を思い出す。

ヒロインのイルザ(イングリッド・バーグマン)が黒人ピアニストのサムと出会う場面。

It's been a long time. (おひさしぶりね) とイルザがサムに語りかえると、Yes, ma' am. A lot of water under the bridge. (はい、いろいろなことがありましたね) とこたえるシーン。

water under the bridge (橋の下の水→水の流れ→人生の流れ) は、川の流れが過ぎ去った懐かしい過去をなつかしむ慣用句です。主題歌 As time goes by とクロスします。

映画はさておき、小唄などの芸能が盛んだった江戸後期に、飯能の人たちと交流が深かった偉人の一人に井上頼国がいます。文久年間に豊島郡下赤塚村(現板橋区)に新居を構えるにあたって原市場の岡部三五郎愛信が材木を提供しています。浅見徳男氏によると、飯能の材木は筏で千住まで運ばれていたということですから、岡部三五郎は飯能の入間川から荒川の早瀬(左岸・早瀬と右岸・赤塚の渡し場)まで材木を筏で運んだのでしょう。赤塚で木匠していた古老から、京都の木は

柔らかいが飯能の木は硬く頑丈なのだと私は聞いたことがあります。井上頼国の先妻・本橋登羅子の実家の故本橋太平氏から現在の家も飯能の材木だと聞いています。飯能史によると安政大地震の時には飯能からの材木が江戸を救ったという。

また浅見氏は当時、飯能地方の村人は、正月に謡いの稽古をしたり、説教節が流行したりして、音曲に関心をもつ人も多かったと言う。

井上頼国は国学者として知られていますが、青春時代は芸能に没頭した学者でした。長谷川伸著『相楽総三とその同志』の一節に、



井上頼国

「……明治年間に有名

だった井上頼国(その前名は井上肥後)は荻田積穂(権田直助)が、門下を率

いて藩邸へはいつたとき、一緒にはいつたが数日後に出てしまった、これは不和を生じたからでも、排斥されたからでもなかった、井上の性格に薩摩屋敷の浪士達とは一致できないものがあつたからだ。

井上は神田っ子で、はじめ朱子学をやつたが、体が弱いので、花柳寿輔について踊りをならい、その後、長唄は杵屋六三郎に、清元は清元延寿太夫に、義太夫は花沢伊沢左衛門に、それぞれ習い、弓術も出来れば剣術も勿論できる、平田鋏胤に国学を学んで深くはいり、朱子学を全く放棄し、権田直助に医術を学んでいよいよ勤王論が身についた。大正三年七月三日、年七十六で他界した。」

と述べている。また、晩年の井上頼国と親交があった三田村鳶魚(新聞記者のち江戸学の大家)著『根津宮永町』の「人情本の体現」の章で、

「かつて井上頼国翁が俺の生涯は者を離れない、初めは医者に成ろうと思ひ、中頃は芸者になろうと思ひ、終に学者になった、と話された」

とあるように、芸能に没頭した時期がありました。三田村鳶魚によると、井上頼国は歌沢能六斎(萩野乙彦)の妻であった端唄の師匠・梅暮里小蝶に習っていたという。井上頼国作とされる唄に「浅くとも」があり、その詞は

浅くとも、清き流の杜若、とんで行き来の

編笠を、のぞいて来たかぬれ燕、
顔が見たうはないかいな。

となっている。井上頼国の蔵書を収めた神習文庫
(町田市・無窮会図書館内)には、若き井上頼国の
著作で一節切や三味線に関する書も残されて
います。

浅見徳男著『明治の女丈夫 田中かく子の生
涯』で、若い頃田中かく子は師井上頼国との思い
出話を語っている一節を浅見氏の現代訳で引用
してみよう。

「……賢明な先生でも、母君と終日おたのし
みの節は(お母さん、この頃町でかような唄
が流行っています)とおっしゃられ、その時
母君は「いついかなる場所で御聞きか」とお
たずねして、「別に足をとどめて聞いたのでは
なく、往来を歩いていて芸者などの唄う声が
聞こえたのです」と返事されました。先生は
何事にあれ、ひと言耳にしたことは必ず忘れ
ることはなく、…」

とあるように、若き頃、芸者を志した頼国にと
って音感の鋭さは劣れず流行歌を覚えようとし
なくても耳に残ってしまったのだろう。

「仲秋の名月・宴」の際、同席の浅見賢治氏が
小学生に英語より古典芸能を教えるべきだと力
説していましたが私も全く同感です。梶田通子氏
の薦めで、森和夫氏や若宮三千代氏、松下静夫氏
らの音曲を拝聴する機会に恵まれ、私にとって飯
能は材木ばかりか古典芸能のメッカでもあるの
です。私は来年刊行予定の『井上頼国と飯能の
人々』で芸能ぶりを紹介したいと思っています。

(2011.12.17 大松閣にて脱稿)

◇◇

ホットラインニュース

2月4～6日 With you さ いたまフェスティバル

平成23年2月4日～6
日、埼玉県男女共同参画推
進センターで開催されまし
た。県内で活躍する男女共
同参画団体の日頃の活動、
研究成果を発表し、またお



上田知事

互交流し、情報交換する絶好の場所でもあります。
我々も展示で参画し、しかも今年も「実行委員」
として活躍し、クイズラリーを新しく設け、すべ
て隅々まで閲覧していただくよう工夫し、飯能も
問題を作り、飯能の女丈夫田中かくと「荻野吟子」
の関係をPRして答えになるようにしました。



以前より「荻野吟子」や恩師である「国学者井
上頼国」「権田直助」が飯能にたびたび来ている
という事実!! 影響を受けている人々は絶対い
ると!! しかも女性の当時の病や医療技術はど
うだったのかとふと思い、調べてみるとなん
と、、、、、、、、。何だこれは。

「本邦帝王切開発祥の
地」の記念碑が本橋家の
入り口に建てられている。
思わず心が騒ぎ、調べて
みました。『執刀医：地元
の医師岡部均平：秩父医
師伊古田純道は翻訳され
たオランダの産医学「撒
羅満氏産論」を読んでい
たと推測。それを実施。

1852年4月25日
「患者の本橋常七の妻み
と」33歳。お産は難産
で地元医師が処置しまし
ましたが、伊古田医師が到着
した時は既に胎児は死亡。
麻酔も使用されず母体が
危ないゆえ西洋医学であ
る帝王切開を行いました。
本橋家の納戸は帝王切開
が行われた場所として残
されています。女性にと
っては一世一代の大仕事
下手すると命に関わる、
荻野吟子も夫から淋病を



岡部均平

移され、女性の立場に立った女医としての執念を達成するきっかけにもなった。当時は女性が医者になることは並大抵のことではなかった。差別や挫折を受けながら難関を突破したのです。この先人の知恵や思いは忘れてはいけなと強く思いました。

☆今年飯能市の男女共同参画室よりクイズラリーの提案や景品を寄付していただき、24年2月のフェスティバルに向け、実行委員としても頑張ります。

◇◇

11月13～20日 吾野宿まちなみ展示会に参加

平成23年11月13日～20日、吾野宿まちなみ展示会に参加し、今回西川材を使ったオブジェの花器に花を生け、出展しました。



間伐材アートプロジェクト(写真・陶芸・絵画)そして地元の東郷神社のもみじまつりが開催されました。最終日には「吾野宿市」の開催。地元の農産物や飯能の西川材を使った品物、いのししカレー、B級グルメのユニークな味噌ぼてとなど即売し、地域を活性化しようと毎年試みております。

梶田は大河原住宅(独楽ハウス)の玄関のイメージにあわせ、西川材を使ったオブジェの花器(作者大松閣旅館:白河氏)に「紅葉の秋」イメージして花を彩りよく生けさせていただきました。



今年池坊は「いけばな池坊550年祭」1462年(池坊専慶)が“花の名手”として、歴史上の文献(碧山日録)に登場。2012年はちょうど550年という節目なので特別に思いを込めて、、、。吾野宿と同様日本独特の豊かな心の文化を未来に伝え続けていきたいと思ひます。

12月3～5日 北陸三社二寺巡りと日本の祭りの原点を体感する心の旅に参加

越中・加賀・能登の隠れた祈りの聖地・・・高岡関野神社・曹洞宗高岡山瑞龍寺(国宝)寺院での座禅・朝粥と参拝・曹洞宗萬年山宗泉寺・輪島重蔵神社(参拝と漆の御膳での朝粥)



本物を味わう・『漆』輪島塗の膳・二の膳で味わう朝粥講 越中礪波地方の報恩講料理
本物に触れる・・・『漆』輪島塗・金沢漆器・高岡漆器「金属」「楽」金沢大樋焼
伝統に触れる・・・オリジナルしめ飾り制作・田の神迎いの伝統行事「あえのこと」(ユネスコ世界遺産)

瑞龍寺の副住職、三田村有純教授(東京芸大漆芸科)をはじめ各地でいろいろな方々のお話や貴重な行事を拝聴いたし、本当に長い年月の伝統の重みを感じ、次世代に伝えていかなければと思ひました。

注釈:暮れのあえのこと(12月5日) 田の神様を祭る「あえのこと」は古くから伝わる民族の宝庫といわれる奥能登を象徴する貴重な無形民族文化財。

「あえのこと」という言葉はご馳走を奨めてもてなすことを「あえ」と言い、祭りを『こと』ということからでているといわれ、田の神様をもてなし御加護を祈り田仕事に励むことを誓い、豊作

に感謝して田の神様をねぎらう・・・。

ご飯を食べ・お風呂に入ってもらおう所作を目の前でお披露目していくのを拝見し、こんな風にして昔から神様を崇め、物を大切に作る精神が培われてきたんだなとその重さを感じました。



に参加します。



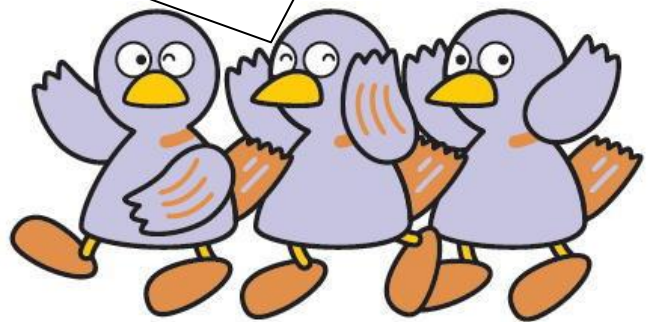
◇4 月 総会と新年会を予定

4 月下旬総会及び新年会。ミニバス旅行東京谷中近辺など予定しています。徳川慶喜・渋沢永一氏・飯能の平沼専蔵氏などなど著名人の足跡を訪ねます。

もちろん 元飯能市郷土館館長「浅見徳男氏」のお話も予定しています。ふるって御参加ください。詳しくは後ほどお知らせします。



ぐるーぷ倶楽志の活動って面白いね。私達も参加しよ〜っと。



埼玉県のマスコット「コバトン」

2012年の活動予定

◇2 月 3 日(金)～5 日(日) 第 10 回 With you さいたまフェスティバル

今年も実行委員だよ。クイズラリーの答えもあるかもよ！！中山千夏さんの講演もあります。



◇2 月 飯能市生涯学習フェスティバル

今年も 2 月に飯能市生涯学習フェスティバル

【会報編集】渡部直也(入間支部)が担当しました。



・ ・ あなたも、ぐるーぷ倶楽志 i n 飯能に参加しませんか ・ ・

地域文化を大切にして、広く伝え、育むことを目指す「ぐるーぷ倶楽志」飯能市地域は古い歴史と自然に恵まれており、特色ある文化を育んできました。特に、住む、着る、食べる、の衣食住は欠くことのできない大切な文化です。私たちは、地域文化を、**俱に、楽しむ、同志**として多彩な文化交流を目指します。そして、地域文化を学習すると共に、これを発信する場として交流を深めます。

※ 連絡は、相田(スギタ) <電話 042-974-3538 携帯 080-3456-2623>まで 入会金 1,000 円